魔法の PJ　活動報告書

報告者氏名：長谷川雅美　　所属：群馬県太田市尾島小学校　　記録日：令和6年1月31日
キーワード：インクルーシブ　　わかる授業

1・対象児童の情報

（1） 通級指導教室通級児童 15 名（情緒通教指導教室　9 名　　国際教室　6 名）
情緒支援学級在籍児童 5 名

（2）　4年生通常学級の児童34名

	情緒通級教室	国際教室	情緒支援教室
年度当初の見立て	● 通級児童9名 （自校7名・他校2名） ● 自校の児童のうち5名は入り込み授業であり，2名は放課後に個別指導を受けている。	● 通級児童6名 パキスタン　2名 ブラジル　1名 フィリピン　2名 ベトナム　1名 ● それぞれの日本語の習得に課題があり，該当学年の学習の習得も困難である。	● 1年生　1名（女子） 2年生　4名 （女子1・男子3） ● 学習に対して興味がもてないなどのさまざまな理由から，授業が成り立たないことが多い。特に2年生全員が交流学級にもいかないことが多く，校庭などで遊んでいる。

2・実践研究の活動の進捗

（1）　当初のねらい

①　自分にあった学習方法や道具を選択し，場面によって使えるようにさせる。

②　学校内の授業支援組織を構築する。

（2）　実施期間　令和5年5月1日から7月21日

（3）　実施者と対象児の関係　教務主任　　4年生算数担当
児童 A.B.C については理科を担当している。
児童 D については週2時間国語と算数を担当している。
4年生の1クラスの算数を11月から担当している

3・実践研究活動内容と対象児の変化

（1） 対象児の事前の状況

① 年度当初の在籍人数と見立て

	情緒通級教室	国際教室	情緒支援教室
年度当初の見立て	● 通級児童9名 （自校7名・他校2名） ● 自校の児童のうち5名は入り込み授業であり，2名は放課後に個別指導を受けている。 対象児A（男子） 昨年10月より通教を始める。在籍する学級から「担任の先生が話を聞いてくれない」と言って飛び出したり，授業中はやりたくないと床に寝ていたりしていた。 対象児B（男子） 知的な遅れがあることが心配させることが入学時からあり，継続的に観察を行ってきた児童である。字を書く時も時間がかかるが，お手本がなくてもひらがなであれば丁寧に書くことができる。	● 通級児童6名 パキスタン 2名 ブラジル 1名 フィリピン 2名 ベトナム 1名 ● それぞれの日本語の習得に課題があり，該当学年の学習の習得も困難である。 対象児C（男子） 両親ともに，小学校1年時に来日した。パキスタン国籍である。簡単な指示はわかる。一文字ずつひらがなは読めるが，読んだ言葉のイメージは持てていないようだ。	● 1年生 1名（女子） 2年生 4名 （女子1・男子3） ● 学習に対して興味がもてないなどのさまざまな理由から，授業が成り立たないことが多い。特に2年生全員が交流学級にもいかないことが多く，校庭などで遊んでいる。 対象児D（男子） 入学の時から特別支援学級在籍である。ADHDの診断を保育園年長時につけている。1年生の時はほとんど校庭にいて土遊びや虫取りをしていた。ひらがなは一文字ずつなら読めるが，カタカナは難しい。

② その他

上記以外にも通常学級に困難さをもつ児童として担任が挙げた児童は26名いる。また，登校渋りの児童も2年生1名，3年生1名，5年生1名，不登校の児童も6年生に1名いる。11月から担当した4年生の中にも，いろいろな困り感を持っている児童がいる。

（2） 活動の具体的手立て

① 自分にあった学習方法や道具を選択し，場面によって使えるようにさせる。

- 一人一人のアセスメントを丁寧に行う。
- アセスメントや面談等で得た情報に基づいたアプリも含めた学習方法の提供を行う。
- 児童の気持ちを大事にしながら，学習方法や道具を選択させる。
- 児童を取り巻く大人に向けて，啓発や協力のための研修を行う。

② 学校内の授業支援組織を構築する。

- 定期的な支援会議を行う。
- 研修をもとに教師の専門性の向上を目指す。
- 教材や教具などの共有システムを徹底する。
- 授業の UD 化を学校全体で取り組む。
- タブレットを使って個別最適化学習が支えられるような ICT 研修を行う。

（3） 対象児の事後の状況とエピソード

① 一人一人のアセスメントを丁寧に行う。

情緒通級，国際通級に通う児童，特別支援学級に在籍する児童及び，通常学級に在籍する気になる児童についてアセスメントを再度取り直した。それには，群馬県の発行の情緒に関するチェックリスト，言葉の習得に関するチェックリストを使ったが，関係者の日頃の観察を一番大事にし，それぞれの学年会で話題に挙げ，話し合いを重ねた。その結果を受け，運営委員会および職員会議において，共通理解協力を確認しあった。

- 児童 A･B のエピソード

昨年度なかなか授業に参加できない児童であったため，学級開き前に話し合いを行った。関係職員での話し合いは下の表のとおりであるが，ほとんど毎日のように放課後になると教頭，教務，担任で「今日の良かったことは」をポイントに話をした。

時期	参加した職員	話し合った内容や支援方法など
4月初旬	4学年担任 理科担当　の4名	昨年度の様子から，授業規律の徹底と個への支援 →授業開始とともに，離席などの課題が予想以上であることが分かった
4月17日 5月22日	同上	一部の授業で指示が通らないとの訴えが職員からあり，再度，指導や支援方法を確認した あわせて，児童と面談
8月2日	4学年担任 音楽担当　の4名	保護者からの情報などをもとに，支援方法や学校全体への協力体制などの確認 →話し合いの内容を運営委員会に提出
夏休み中	運営委員会	国語の授業について個に合わせた授業の展開が必要ではないか→支援体制に合わせた時間表の改正・職員の配置の検討
9月1日	職員会議	時間表の改正承認

冬休み中 3学期	学年研修	2学期の反省を生かした時間表の改正

②アセスメントや面談等で得た情報に基づいたアプリなどの学習方法の提供を行う。

- 児童 C のエピソード
  昨年度までは授業に参加してもなかなか理解のできない児童であると思われていたが，英語が話せることが4月にわかり，本児と相談し，できるだけ英語で指示を出すこととなった。担当の英語力もあるため即時で指示は出せないことが多いことから，理科の授業では，翻訳アプリを使って，教科書を英語に翻訳して渡したり，事前に流れについて英語で書いたものをわたしたりしている。また，学習ノートについては，児童自身が写真を撮ったり，それを翻訳したりして授業に参加している。
- 児童 D のエピソード
  ひらがなを一文字一文字確認して，自分の声を合わせながら，書くことが多く，時にはイライラしてしまうこともあった。そこで，Chromebook の音声入力を利用し，まず，自分の音を文字に変換し，それを参考にすることから始めた。また，10月には，国語の時間に学校の紹介文を作ることを教材とし，Chromebook を用いて学習を行った。
- 児童 B のエピソード
  1学期に職員でアセスメントのため会議を開き，時間割の改正などを行って対応をしてきたが，2学期になると，なんとか授業には参加しているものの，なかなか学習が定着しないことから，「どうせ」という言葉が増えてきた。そこで，担当する理科では，単元の最初に NHK for School で全体像を見せ，まとめにも同じ内容の違う番組を視聴させた。テストの前には，家庭学習として視聴をすすめた。テストの結果が良くなるにつれ，「どうせ」は少なくなってきた。 児童にも，動画で学習することを進めた。
  児童 A・B が所属する学級にも，この単元の進め方が合う児童が多く，テスト平均が上がってきた。

② 児童の気持ちを大事にしながら，学習方法や道具を選択させる。

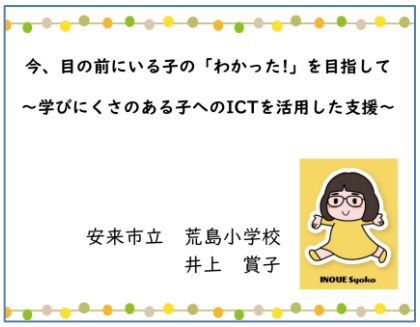
- 児童Aのエピソード
  理科の授業では，授業の見通しが持てるように，「今日の学習メニュー」を明示している。4月に本児と話をしたときに，「3年生の時はいったい何をどうやればいいかわかんなかったし，聞くと今はノートを書く時間だとか言われて。どうしていいか，わかんなかったんだよ」と言った。そこで，授業中のまとめでは，プリントで行ってもよいし，学習ノートを使って行ってもよいとしている。本児は，かっこに適切な言葉を選んで入れるプリントを選ぶことが多かった。
- 4年生の算数でのエピソード
  11月から4年生の1クラスの算数では，子供のニーズに合わせて授業を行うことを心掛けた。具体的には，計算の苦手な児童には計算機，かいけつ下敷き，九九表などから自分に必要な道具を選ばせ授業に参加させた。テスト時には，どこまでそれらの道具を使うのか

について相談してから，テストを受けさせた。下の写真は教室の後ろにおいてある，計算機，ホワイトボード，かいけつ下敷きなどである。

③　児童を取り巻く大人に向けて，啓発や協力のための研修を行う。

- 夏休みの研修

7月26日に井上賞子先生を招き，研修を行った。本校だけでなく市内の教職員，本校の保護者にも参加を呼び掛けた。そうしたところ，総勢80名の参加があった。



④　定期的な支援会議を行う。

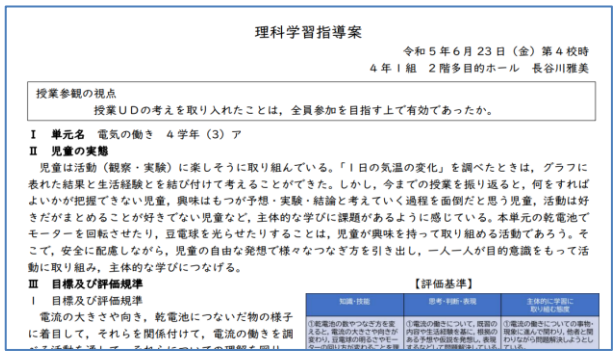
1学期の指導･支援をもとに，それぞれの学年で支援会議を行った。話し合った内容は，学校全体で共有し，特に支援会議で出た「お願いしたいこと」を実現するためにどうしたらよいかを運営委員会で話し合った。そこで，児童の学級の動きや通級に行ったときの児童の人数や学習のタイプなどから，学校全体の時間割の見直しを行った。表は，4学年の要望を受け，国語の授業担当を4人に増やしたものである。4学年は社会，外国語，理科および実技教科について教科担当制をしているため，時間割を変えるには，学校全体の見直しが必要となった。2学期の反省をもとに，冬休みには，再度子供について話し合いを行い，T2 の支援を増やすことを目指して時間表を変更した。

令和5年度　**時間割表**

クラス	月						火					
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
4の1	国	外国	体	社	算	ク	理	算	社	体	国	図
4の2	国	社	外国	算	国	ク	体	国	図	社	算	理
4の3	算	体	国	外国	社	ク	算	理	体	図	国	総
	国語をそろえて4クラスに											
4の1	国	外国	体	社	算	ク	理	国	社	体	算	図
4の2	国	社	外国	算	総	ク	体	国	図	社	算	理
4の3	国	体	算	外国	社	ク	算	国	体	図	理	総
国語	国	31図	32図	33図	通			国	音・図	43入	音・図	

⑤ 授業の UD 化を学校全体で取り組む。

本校では校内研修のテーマ「わかったを目指して～UDの考えを授業に取り入れて～」に基づき，授業実践や研修を行っている。



理科学習指導案

令和５年６月 23 日（金）第４校時
４年１組　２階多目的ホール　長谷川雅美

授業参観の視点
授業ＵＤの考えを取り入れたことは，全員参加を目指す上で有効であったか。

Ⅰ　**単元名**　電気の働き　４学年（3）ア

Ⅱ　**児童の実態**

児童は活動（観察・実験）に楽しそうに取り組んでいる。「１日の気温の変化」を調べたときは，グラフに表れた結果と生活経験とを結び付けて考えることができた。しかし，今までの授業を振り返ると，何をすればよいかが把握できない児童，興味はもつが予想・実験・結論と考えていく過程を面倒だと思う児童，活動は好きだがまとめることが好きでない児童など，主体的な学びに課題があるように感じている。本単元の乾電池でモーターを回転させたり，豆電球を光らせたりすることは，児童が興味を持って取り組める活動であろう。そこで，安全に配慮しながら，児童の自由な発想で様々なつなぎ方を引き出し，一人一人が目的意識をもって活動に取り組み，主体的な学びにつなげる。

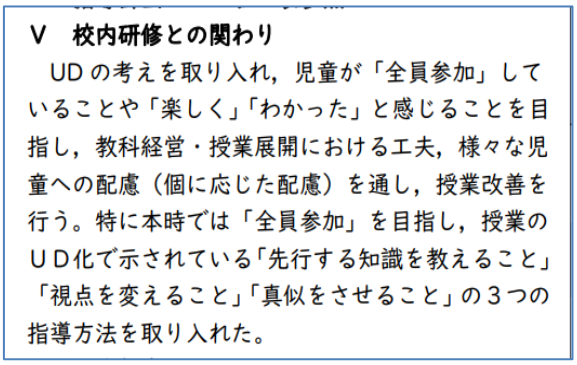
Ⅲ　**目標及び評価規準**

【評価基準】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①乾電池の数やつなぎ方を変えると，電流の大きさや向きが変わり，豆電球の明るさやモーターの回り方が変わることを理	①電流の働きについて，既習の内容や生活経験を基に，根拠のある予想や仮説を発想し，表現するなどして問題解決している。	①電流の働きについての事物・現象に進んで関わり，粘者と関わりながら問題解決しようとしている。

Ⅰ　目標及び評価規準

電流の大きさや向き，乾電池につないだ物の様子に着目して，それらを関係付けて，電流の働きを調べる活動を通して，それらについての理解を図り



Ⅴ　校内研修との関わり

UD の考えを取り入れ，児童が「全員参加」していることや「楽しく」「わかった」と感じることを目指し，教科経営・授業展開における工夫，様々な児童への配慮（個に応じた配慮）を通し，授業改善を行う。特に本時では「全員参加」を目指し，授業のＵＤ化で示されている「先行する知識を教えること」「視点を変えること」「真似をさせること」の３つの指導方法を取り入れた。

- 6月に行った研究授業

  研究授業では，指導方針として次の3つを挙げ，単元の指導を行った。

  一つ目，児童のレディネスの差の解消のために，3 年生の学習を NHK for School 視聴で補う（宿題）。

  二つ目，単元を通して，児童が学習課題をもち続け，主体的な学びにつながるように，体験活動から授業を始めたい。

  三つ目，問題・予想・実験・結果・まとめ・実生活へ生かすことなどの一連の学習過程では，児童一人一人の学び方（考え方・アウトプットの特性など）を生かすべく，丁寧に支援をする。

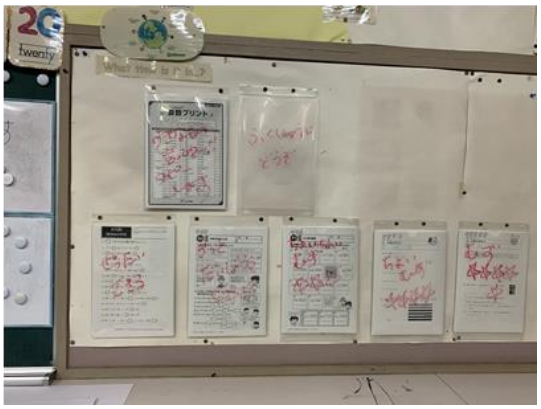
- 本校での授業の様子

  校内研修では，前期後期で10の授業が行われた。また，2学期は全職員が一人一授業をし，校内で公開授業を行った。特に焦点化，視覚化，共有化を行った。

- 算数での授業の様子

  4年生の算数の授業では，様々な児童のニーズにこたえるために，宿題プリントは選択制にしている。算数教室の後ろにプリントを置き，設定された枚数を自分で内容を選んで宿題をしている。

  宿題プリントは，過年度の内容もあれば，現在学習している内容の基礎，発展もあり、多種類用意した。



⑥ タブレットを使って，個別最適化学習が支えられるような研修を行う。

4月の第2週に，国際教室担当，特別支援学級担任に iPadに入っているアプリについて研修を行った。現在使用しているアプリは表の通りである。

国際教室	特別支援学級
かん字ドリル	算数忍者
常用漢字　筆順	かん字ドリル
カメラ	ひらがな
例解学習	ひらがなシューター
NHK for School	NHK for School

- 児童Dのエピソード

昨年度，今年度の5月2週まで，自分の興味のあることを優先したり，気持ちが収まらなかったりして授業に参加できずにいた。5月3週から，本児と国語，算数を行うこととなった。そこで，算数忍者やかん字ドリル，ひながなシューターを活用して授業を行いたいと相談したところ，大変興味を持ち，45分集中して授業に取り組むことができている。また，「家で宿題をするから，カラーノートに漢字を書いて」と言い，週に1回は10個ずつ漢字を提示し，家で練習している。2学期になると，「国語ではこれを使ってやる」と自分で決め，学習をどんどん進めている。

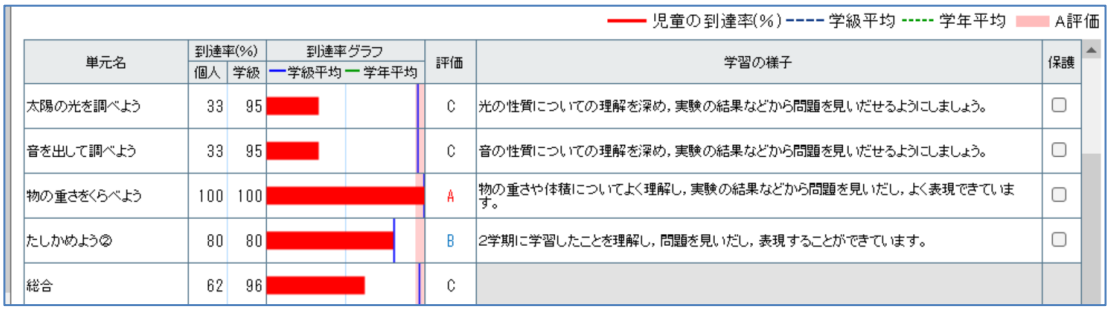
4・報告者の気づきとエビデンス

(1) ここまでに得られた成果

①児童にとって

どの児童も 4 月当初に比べ，「変わってきた」という印象を持つ。

特に児童 C については，動画や翻訳機能と取り入れての指導，それを使っての説明を取り入れたこともあり，「これでいいかな」と聞くことはあるが，1 月の「あかりをつけよう」では説明書を見ながら，実験キットを使って学習を進めることができた。2 学期のテストの点数の推移は下のグラフの通りである。生活に関わっていたり、体験したりしたことのある「重さ」では、満点を取ることができた。



単元名	到達率(%) 個人	到達率(%) 学級	到達率グラフ（学級平均・学年平均）	評価	学習の様子	保護
太陽の光を調べよう	33	95		C	光の性質についての理解を深め，実験の結果などから問題を見いだせるようにしましょう。	☐
音を出して調べよう	33	95		C	音の性質についての理解を深め，実験の結果などから問題を見いだせるようにしましょう。	☐
物の重さをくらべよう	100	100		A	物の重さや体積についてよく理解し，実験の結果などから問題を見いだし，よく表現できています。	☐
たしかめよう②	80	80		B	2学期に学習したことを理解し，問題を見いだし，表現することができています。	☐
総合	62	96		C		

また，途中から算数を担当した4年1組のテストの点数をみると、11月から平均点は上がってきた。それは，もちろん学習態度や学級の雰囲気が変わってきたことも大きいが，自分でどのように勉強をすすめればよいかがだんだん理解できたことが大きいと感じる。「計算機を使えば計算が確実になり点数が上がった。だから、計算がもっと確実にできるようになりたい」と割り算のやり方を教えてほしいと声をかけてきた子供がいた。また、週5 時間のうち、金曜日の 1 時間を「自学時間」し、わからないことを友達と学習しなおしてもよいし、先生に聞いてもよいし、自分でしらべてもよいとした。子供たちはそれぞれのやり方で、教室の好きな場所に移動し、リラックスして問題集を解くなど、楽しそうに授業時間を過ごしている。そのような姿を見ていて、「できたか、どうか」のものさしで子供を見るだけでなく、「どこまでできているのか」「理解をしているのに、文字が書けていないのでは」「どのような学習環境、方法がよいのか」など、子供を理解するさまざまな教師の視点が必要であると強く感じていた。

②教師にとって

学年が上がる4月には，どの学校でも行っている引継ぎをする。しかしその内容について，疑うことなく受け止めてきた。今回，関係する職員が，自分の観察をもとに，「なぜこのようなことをするのか」「自分の授業の問題点はなにか」という視点で再考する機会が得られたことは，成果があったと感じている。当たり前の引継ぎを，疑うわけではないが，自分の感覚で見直すことには意味があると感じた。また，それらについて関わりのある教師が共有し，教材教具，授業展開および支援方法を何度も検討することも成果があった。

③校内研修

7月に行った校内研修のあとに取ったアンケートには，「今まで子供のせいとしていた自分が情けない」「なぜを大事に，子供を見ていきたい」「2学期に役立てられる」「具体的な支援を知ることができた」をいう言葉が多くみられた。井上先生の「なぜから困難の背景に目を向ける」が印象的な言葉であると挙げた先生もいた。

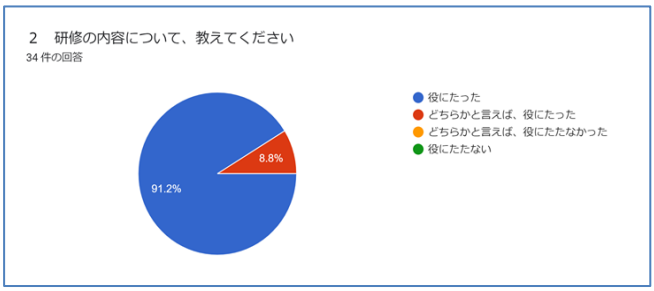
「なぜ？」から困難の背景に目を向ける

- 「漢字の定着が進まない」という同じ現象でも
- 空間関係のとらえに困難があるのか
- 構成を分解したり統合したりすることに困難があるのか
- 細かな情報を落としているのか
- 視覚的な記憶に困難があるのか
- 不器用さの困難があるのか
- 怠学の問題なのか

などなど・・・

その困難が生じている背景によって、手立ては違ってくる

アンケートの結果は以下の通りである。



（参加者の感想）

- 学習に困難を感じている児童が、学習に参加できる手立てだけでなく、「分かった」と思えたり、前向きになれるような手立てを知ったりすることができた。
- 児童の見方をかえ、どう関わるか、どうすれば分かってもらえるかを考えるのは、教師である。児童の特性のせいにし、どうしてできないの！なんでやらないの！という声が、この研修を通してなくなっていくことを期待したいです。
- 「子どもに合わせて教材を変える」という視点が自分にとって新しく、その視点で考えるといろいろと可能性が見えてきました。具体的な手立てやアプリもとても参考になりました。ありがとうございました。
- 普通学級にも、今回紹介して頂いた支援が必要だと感じる児童がおり、学級で使用することを考えたときに、簡単に活用できると感じた。早速、校内の先生方にも少しずつ伝えています。

（2）今後の課題

当たり前であるが，教室の中には様々なニーズの子供たちが存在している。しかし，ほとんどの子供たちは一斉指導に何とか適応しているため，今まで私たちは自分の指導や支援の方法など考え直すこともなかった。しかし，今年度は，教室が荒れている原因に，個別の対応のなさや一斉指導の課題が挙げられた。しかも、不登校児童が増えつつある。子供たち一人一人を理解し、学びを支えていくためには、どうしたらよいかについて，管理職と連携を取りながら，解決策を探っていきたい。そして，残りの期間でこれまでの実践をより良いものにすべく実践を重ねしながら，次の3つを併せて行っていきたい。

①師の専門性の向上を目指す研修や個別最適化学習が支えられるような研修を提供する。また，個別最適からうまれるゆるやかな協同性ついても研修が必要である。

②職員の働き方改革の一環として教材や教具などの共有システムを構築する。

③子供に原因がある」という見立てではない児童理解に基づいた前向き話し合いができる雰囲気を職員室に作る。

そうすることで，子供のために頑張る先生たちを支えていけると考えると共に，子供の学びを保証していくことにつながると信じて，これからも子供と向き合っていきたい。